

THE Game of  
DANGANRONPA 一機関編一

ダンガンロンパ4作者

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

数年後の未来ー烏岳紅葉は行方不明の妹を探す未来機関に入った。

そして、ある日会議の話題に出されたのは『絶望の残党』。そのリーダーは…紅葉の妹、紫苑だった。

一方、絶望の残党のリーダー、烏岳紫苑は未来機関の一人、江ノ島盾子を重症の怪我をさせた。

そして、ついに対面勝負。必ず逃げた黒幕の西流から取り戻すため、絶望と希望が戦う！

# 目次

P r o l o g u e 1	希望を私達は見捨
てなかつた	1
P r o l o g u e 2	未来機関と書き正
義の団体と呼ぶ	6



# Prologue 希望を私達は見捨てなかつた

これは、ある男の野望とそれに巻き込まれる少年少女達の物語だー

ぎいいいい…

紅葉「で、出れた…」

桑田「よっしゃー！」

さやか「出れましたね！」

朝日奈「皆無事でよかつたね！」

由李「ふえええ…死ぬかと思つたよお…」

江ノ島「バカは死なないって言うの知らないの？」

由李「バカじゃない！」

苗木「まあまあ、喧嘩しないで…」

皆で出れたんだ。生きてるんだ。希望は私達を見捨てなかつたんだ。

紅葉「…嬉しい…」

石丸「で、これからどうするのかね？紅葉くん。」

不二咲「そういや、ここ…どこお？」

セレス「まあ、天国でも地獄でもないのは確かですわね。」

山田「考えられるのは…ここは…」

紅葉「どうしよう…ここ…」

その時だった。

ちさ「おーい！大丈夫ー？」

静子「よかったわ、怪我もなくて…安心した。」

流流歌「ほんと。てか、西流は？」

紅葉「そ…それは…」

十六夜「…逃げたな。仕方ない。あいつは未来機関でも重犯罪を繰り返している男だからな。」

京介「…烏岳紅葉か？」

紅葉「え…私ですが…」

京介「探していた。一緒に来てもらってもいいか？」

紅葉「…え？」

朝日奈「ちよ、ちよつと！紅葉ちゃん連れ去る気?!」

逆蔵「仕方ないだろう。少し聞きたいことがあるからな。…お前らもだぞ。」  
由李「こ…こわあい…」

腐川「と…とりあえず行きましようよ、また殺される前に…」

十神「…今回は腐川の言うとおりだ。行くぞ。」

紅葉「…わかった。」

― 未来機関 ―

紅葉「これが未来機関…!」

ちさ「びつくりでしょ、広いもんね。」

紅葉「…あの…なんで私達がここに…」

ちさ「ん…とりあえずの保護と、未来機関に入ってほしいの。」

紅葉「…え?!」

ちさ「まあ、詳しくは言うから、ね?」

紅葉「…」

ぎい…

天願「おお、よく来たね。」

紅葉「ど…どうも…」

天願「まあ、おかけなさい。」

紅葉「あ……ありがとうございます……」

ガタ……

天願「……さて、雪染ちさくさんから聞いていると思うけど、君たちには未来機関、ここに入ってもらいたんだ。」

紅葉「し……しかし、なぜ……そんな急に……」

天願「烏岳くん、君はこれまでずっと西流と戦ってきた。もちろん、君の妹さんも……  
藍染くんも。」

紅葉「……はい。」

天願「だからこそ、止めてほしいんだ。重犯罪S級の『超高校級の絶望研究者』、西流克平を。」

紅葉「……あの……もし、止めれたら平和に暮らせますか？」

天願「そうだと。君たちは普段どおり、学生として生きていけると思うよ。」

紅葉「……」

もし、今止めなかったらどうなるんだろう……

このまま、死んでしまうのか……

なら、行くしかない……



怖いけど……行くしかないんだ！

紅葉「……わかりました。これからよろしくおねがいます。」

天願「……頑張ってくれたまえ。後……死なないようにな。」

紅葉「……はい。」

これから、私達が私達の未来を……作っていくんだ。

しかし、この先壮大なる絶望世界が待っているのを私は知らなかった。

# Prologue 2 未来機関と書き正義の団体と呼ぶ

バタン…

紅葉「はー…」

ちさ「紅葉ちゃん、どうだった？」

紅葉「◆◆○○●▽▽◆△△□くく?!」

ちさ「そんなに驚かなくてもいいじゃない。それより、おめでとう。ようこそ、未来機関へ。」

紅葉「…えっと、改めて『超高校級のなんでも屋』の烏岳紅葉です。」

ちさ「はじめまして。『元超高校級の家政婦』の雪染ちさよ。よろしくね。」

紅葉「えーつと…元？」

ちさ「そうなの。希望ヶ峰学園の卒業生だからね。」

紅葉「ああ…そゆことですか…」

※また後に書きます すみません…

紅葉「じゃあ…あの人たちも…」

ちさ「うん。卒業生だよ。」

紅葉「凄いなあ……」

不二咲「……あ！紅葉さん、大丈夫だった？」

紅葉「え、うん……隣の人は……」

不二咲「えつと……月光ヶ原美彩さん。話せないけどパソコンで……」

紅葉「……え？」

美彩「……」

〃ハジメマシテ 月光ヶ原美彩デス〃

紅葉「あ……はじめまして……」

美彩〃不二咲サンガサガシテイタカライツシヨニサガシタ〃

紅葉「あ、そうなんだ……ごめんね、不二咲さんと美彩さん。」

不二咲「あ……それがなんか皆さん呼ばれているらしくて……」

紅葉「……？なんだろう……」

―会議室―

ウイーン……

紅葉「遅くなりました……」

天願「嗚呼、気にさなくていいよ。」

十六夜「……始めてもいいか？」

紅葉「あ、はい…」

十六夜「今回、お前たちは阻止してほしい団体がある。それが、『絶望の残党』だ。」  
朝日奈「絶望の…残党？」

十六夜「所謂、テロ組織的なものだ。これがメンバーだ。希望ヶ峰学園の77期生のB―1というクラスの…」

紅葉「…えっ…?!」

桑田「…これ…烏岳…知ってんじやねえの…?」

安藤「え?知ってるって…もしかして…」

十六夜「…リーダーか?」

紅葉「…はい、私の…妹です…」

忌村「え、妹…?!」

紅葉「行方不明になってたのに…なんで絶望の残党なんか…」

大和田「おい…行方不明って…」

紅葉「数日前に学校から帰ってこないから心配してて…行方不明だったの…なのに…」

十六夜「考えられるのは西流克平。重犯罪の超高校級の絶望研究者だな。数日前に脱出している。」

ちさ「…同じ日にちに…妹さんが行方不明になって…西流克平は脱獄して…」

宗方「だから、止めてほしい。西流克平の根端を、計画を。」

紅葉「…私にはっ…」

由李「何言つてんのお…頑張ろっ。」

紅葉「…妹を殺すなんてできない…」

十神「殺しをするなどは言つてないだろう。」

紅葉「だ…だけど…」

石丸「紅葉くん。僕達は未来機関なんだ。人々が殺されるよりも妹が大事かね？」

紅葉「…」

石丸「どちらも救い出そう。必ず。」

紅葉「…わかりました。やります。」

天願「では、頼むよ。」

忌村「もし無理だったら助けに行くからね。」

安藤「頑張つてね！」

逆蔵「待て。誰が誰を助け出すのか決めとけ。わからなくなるとお前らが死ぬ。」

霧切「確かにね。決めときましようか。」

―休憩室―

霧切「今回のメンバーは鳥岳紫苑を中心に、左右田和一、田中眼蛇夢、ソニア・ネヴァー  
マインド、罪木蜜柑、小泉真昼、式大猫丸、終里赤音、狛枝凪斗、瀧田唯吹、葭原茉莉  
花、木菟星汰、…多分偽物の御手洗亮太、花村輝々、九頭龍冬彦、辺古山ペコ、日向創、  
七海千秋、西園寺日寄子よ。」

石丸「…どうやって決めようか…」

苗木「うーん…じゃあ、僕は日向創君で行くよ。」

江ノ島「…木菟星汰でいいわ。」

戦刃「…瀧田唯吹で…」

大和田「その…ガンダム？つてやつ。」

さやか「じゃあ、七海千秋さんで。」

霧切「私は小泉真昼さんでいいわ。」

腐川「じ、じゃあ…罪木蜜柑でいいわよ…」

不二咲「ええ…西園寺さんでいいかな…」

朝日奈「よしっ、終里赤音ちゃんがいいよ！」

大神「我は式大猫丸でいい…」

十神「…偽物の御手洗亮太でいい。」

葉隠「狛枝つちでいいべ！」

セレス「では私はソニアさんで。」

山田「じゃあ、花村さんでよろしいですぞ。」

桑田「…九頭龍と辺古山で。」

由李「私はあ…茉莉花たんでいいよお。」

紅葉「…妹で。」

石丸「では…僕は…左右田和一くんか。」

霧切「決まったわね。じゃあ阻止しに行きましょうか。」

紅葉「…うん。」